

「山古志 復興新ビジョン研究会」

第4回全体会議 議事概要

1.日 時 平成18年5月8日(月) 11:00~12:00

2.場 所 ニューオータニ長岡 2F「雪椿」

3.議事概要

ビデオ上映「中越地震の被災地はいま～2年連続の豪雪のなかで～」

- (1) 出席者照会と配布資料の確認(省略)
- (2) 委員長挨拶(省略)
 - ・江村 隆三
- (3) 衆議院議員 長島忠美氏メッセージ紹介(省略)
- (4) 山古志復興新ビジョン研究会 活動報告
(事務局より資料 3,4,5,6 説明)(省略)

意見交換

(丸山(結)委員)

- ・「株式会社山古志村」構想は良い構想だと思うが、まだ被災地の真只中にいる住民と外にいる我々の考え方とはギャップがあり、断念せざるを得ないと感じた。
- ・山古志は歴史・文化が違う集落が集まってできている地域であるため、山古志全体を1つにまとめるのは難しいと分かってきた。そこで、可能な範囲で1人ずつ手を上げる人を集め、女性5人の「あねさの会」を立ち上げた。この会は、自分たちに何ができるかを話し合った。山古志の食材を使って料理を提供でき、歴史を語る事ができる。加えて被災体験を語ることは使命であると考えて、視察で訪れる人に話をしている。住民の自主性、自立を外からサポートするやり方がいいと思った。

(平井座長)

- ・集落ごとに復旧・復興の動きが見られるが、もう少し長期レンジで物事を考えることが必要である。

(丸井委員)

- ・山古志をだけでなく、もう少し広く被災地全体を考えることは大切である。
- ・防災は、地震だけでなく、豪雪、水害、台風などにもいえることである。防災フロンティアを成功させて、地域をより安全な空間として発展させることが重要だ。
- ・世界各地で同じような自然災害が起こっており、中山間地の復旧・復興は世界的な問題である。この研究会で議論されたことは、他地域にも伝えていけると考えている。

(伊藤(忠)委員)

- ・復旧事業は平成 18 年までの 3 年で終わるが、お金を掛けても、住民がそこに住み続けられるのかという不安もある。ただ、一方ではようやく生活再建の目処も付いてきているようで、住民に元気が出ている。
- ・地域の特産をどのように活かすか考える必要がある。
- ・株式会社山古志村の断念は残念である。地域産業の基盤として、資源に着目することが農業の力になる。

(江村委員長)

- ・大都会では、大震災が風化しやすい。日に日に関心が薄くなるのが気になる。

(伊藤総合アドバイザー)

- ・今回の災害は、2 度の大雪を受けるという複合災害でもある。この地域は、地震活動、大雪、集中豪雨が多発するような典型的な地域である。地球の温暖化が進行すると、異常気象が多発する状況となり、気温が上がると大雪の原因となり、同じような現状が起こってくると考えられる。山地における地すべり、斜面崩壊などでは多くの共通点がある。中越地震の情報発信は、必ずや海外へと繋がっていく。
- ・長期的な対策として、将来、被災者が元の土地へ帰る際に大切なことは、雪、地震にも強い建物を作らなければならないということである。耐震性が必要である。個人の負担だけでは難しいので、自治体でも考えていかなければならない。

(木村アドバイザー)

- ・被災者は、住宅再建が終わると、復興への思いが消えてしまうことが多い。そういうことを見据え、被災地支援をどうするか考えていく必要がある。
- ・雲仙普賢岳の災害から 15 年経過したが、現地は、住宅再建はできたが農地がなくなり、高齢者が住めない状況になっている。精神面、健康面からも復

旧・復興計画に提案する必要がある。

- ・被災者を中心とした組織の立上げは難しいため、スタート時点の支援（仕組みづくり）が重要だと感じた。

（西澤座長）

- ・このビジョン研究会では、一気に株式会社山古志村を立ち上げるのではなく、ノウハウの習得などの教育を行いながら、具体的な事業活動を学習し、株式会社を立ち上げていこうという議論があった。事業活動をどう具体化するのは、山古志の復興だけでなく、今後の中山間地の生活を考える意味でも重要である。農業そのものでなく、物を生産して販売するという事業活動を軌道にのせて、1つのモデル作りをしたいという意図があった。株式会社を辞めるのではなく、意見交換をしながら、事業活動をやっていくことを考えていくことが大事だと思う。

（樋口委員）

- ・NPO 法人の設立を含めて、この研究会で議論したことが、時間の経過のなかでいろんな形に変わっていくことも良いと思う。

（江村委員長）

- ・引き続き、皆さんが全面的な協力を頂けることを確認しつつ、当会は発展的解散とする。

閉会

（文責：事務局山口）